



Title	1960年代初頭フィラデルフィアにおける平等雇用をめざした黒人の闘い：アファーマティブ・アクションとコミュニティ再生
Author(s)	安井, 優子
Citation	パブリック・ヒストリー. 2008, 5, p. 43-56
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66456">https://doi.org/10.18910/66456</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 1960年代初頭フィラデルフィアにおける平等雇用をめざした黒人の闘い

アファーマティブ・アクションとコミュニティ再生

安井倫子

## はじめに

1963年4月、ペンシルヴァニア州、フィラデルフィアにおいて人種平等会議（以下CORE）の若者13人が、市庁舎の中の市長室を占拠し、「市の建設プロジェクトにおけるジム・クロウを終わらせよ」と気勢を上げた。おりしも、南部アラバマ州バーミングハム市では、マーティン・ルーサー・キング師に率いられた公民権闘争の荒々しく弾圧される有様が、メディアを通じて世界中に露わにされていた。アラバマの闘争とフィラデルフィアのこの闘争を、ふたつとも大きく取り上げていたのは、当時の『フィラデルフィア・ブルティン』紙の第1面だけであった。<sup>(1)</sup>

COREによる市長室の座り込みは、以後2カ月以上にわたって続いた闘いの始まりであった。全国黒人地位向上協会（以下NAACP）フィラデルフィア支部を中心とした黒人組織とコミュニティは、時には1,000人規模の黒人大衆の動員によって建設現場を取り囲み、建設を一時中止させるなどの実力行使を背景に、市当局、建設業者、および組合と交渉し、雇用における人種差別を禁じ、市の契約業者は黒人を積極的に雇用することに同意しなければならないという画期的な内容の条例を制定させた。<sup>(2)</sup>下からのアファーマティブ・アクションの実現である。本稿は、この1960年代初頭のフィラデルフィアの闘いの意義を運動の指導性や方向性の視点から検討する。

フィラデルフィアの闘いは、北部大都市の雇用平等を求める黒人運動のさきがけとなった。アメリカの人種問題の解決は公民権だけでは不可能なことを認識したケネディは、1963年の大統領命令の中で、「アファーマティブ・アクション」（以下AAと表記）という言葉を使って黒人の雇用問題を取り組む姿勢を打ち出した。続いてジョンソン大統領は、翌年公民権法を議会で通過させると、1965年大統領命令11246によってAA政策を内政の中心課題とする。ジョ

(1) “CORE Pickets Tate's Home and City Hall,” *Philadelphia Bulletin*, April 14, 1963; “CORE Says It'll Prod Tate until City Job Bias Ends,” *ibid.*, April 17, 1963.

(2) “Mayor Signs City's Fair Practice Law,” *ibid.*, June 10, 1963.

ンソン政権は「貧困との闘い」を宣言し、AA はその中核となるものであった。<sup>(3)</sup> フィラデルフィア黒人の闘争が連邦の AA 政策の導入に大きく貢献したと言える。

しかしながら、連邦による AA 政策は、当初からその公民権法との矛盾が指摘され、その正当性・有効性は疑問視された。<sup>(4)</sup> しかも、AA が必ずしもアメリカの人種関係の改善に役立ってきたとはいえない現実がある。他方で、AA は、1960 年代においては、黒人労働者の生活実態からの切実な要求を反映したものであった。フィラデルフィアでは、AA の導入は草の根からの要求であった。黒人側は、当時ある種の「タブー」であった「割当て・クオータ」にまで言及して運動をリードした。<sup>(5)</sup> 重要なことは、この闘いが自立的黒人コミュニティの形成の課題と結びついていたことによって、白人を含めた世論の支援を得ることができたことである。このことは、連邦段階では AA の導入は国論を二分する論争に直面したが、フィラデルフィアでは兩人種の政治的提携関係が失われなかつたことの要因であった。<sup>(6)</sup>

フィラデルフィアの運動に関してトマス・スグルーがその展開を紹介している。彼はこの運動を「下からの AA」獲得であるとしながらも、白人建設労働者が反対勢力として果たした役割を重視する。彼によれば、1930 年代のアメリカの労働者階級の形成そのものが「白人」としてのアイデンティティ獲得の過程であった。1960 年代末に顕在化したかに見える白人労働者階級と黒人公民権勢力の対立の構図は、第二次大戦前からすでに定着していたのである。白人労働者は、黒人の AA の要求を、労働者の権利への敵対であると見なしたからこそこれに反発し、抵抗してきたとスグルーは主張している。AA への「草の根の敵対心」である。彼は、このような白人労働者の意識を「白人の特権意識 niche of whiteness」<sup>(7)</sup> と呼んだ。

しかし、1970 年代以降の AA への反発は、白人側からの「逆差別論」に基づいた議論ばかりではない。AA は「真に不利な立場」の人びとに届くものではなかったという、その不十分さ

(3) Hugh Davis Graham, *The Civil Rights Era Origins and Development of National Policy 1960-1972*, Oxford University Press, 1990.

(4) U. S. Congress, Senate, Committee on the Judiciary, Subcommittee on Separation of Powers, *Hearings on the Philadelphia Plan: Congressional Oversight of Administrative Agencies (the Department of Labor)*, 91 Cong., 1 sess., Oct. 27-28, 1969, pp. 26-30. なお、この公聴会では、ニクソン政権によって提案された「改正フィラデルフィア・プラン」の討論が徹底して行われた。John David Skrentny, *The Ironies of Affirmative Action Politics, Culture, And Justice in America*, The University of Chicago Press, 1996, pp. 204-209. William B. Gould, *Black Workers in White Unions: Job Discrimination in the United States*, Cornell University Press, 1977, p. 299 も参照。

(5) Philip F. Rubio, *A History of Affirmative Action 1969-2000*, University Press of Mississippi, 2001, pp. 114-134.

(6) Richard A. Keiser, "The Rise of a Racial Coalition in Philadelphia," in Rufus P. Browning, Dale Rogers Marshall and David H. Tabb (ed.), *Racial Politics in American Cities*, Longman, 1990.

(7) Thomas J. Sugrue, "Affirmative Action from Below: Civil Rights, the Building Trades, and the Politics of Racial Equality in the Urban North, 1945-1969," in *Journal of American History*, Vol. 91 No. 1, June 2004, pp. 145-173. 「白人の特権的地位 niche of whiteness」については、Thomas J. Sugrue, "Breaking Through: The Troubled Origins of Affirmative Action in the Workplace," in John David Skrentny (ed.), *Color Lines: Affirmative Action, Immigration, and Civil Rights Options for America*, The University of Chicago Press, 2001, pp. 31-52 を参照。「白人性 whiteness」については、デイヴィッド・R・ローディガー（小原豊志・竹中興慈・井川真砂・落合明子訳）『アメリカにおける白人意識の構築——労働者階級の形成と人種』、明石書店、2006 年を参照。

や実効性への疑問も呈されている。<sup>(8)</sup>同時に、AAを政策的に利用した側の意図も考慮するべきである。スクリントニーによれば、共和党ニクソン政権の「改正フィラデルフィア・プラン」の意図は、公民権支持勢力と民主党を切り離すことにあった。AA政策は公民権以後の運動内部に新しいジレンマを投じたのである。<sup>(9)</sup>

本論は、以上のようなAA政策をめぐる議論に対して、第三の選択肢を先駆的に提起した闘いとして、フィラデルフィアの闘争を取り上げる。フィラデルフィアでは、社会的経済的平等の確立が、南部公民権と同時期に、黒人の不可欠の課題であると捉えられていた。60年代初頭から大きく変化し、高揚した、先駆的なフィラデルフィアの黒人運動とそのリーダーシップの中に、AAをめぐる混迷した議論へのひとつの解答がある。

フィラデルフィアの運動を指導したリーダーは、人種差別を糾弾し、雇用平等を求め、AAの実現をめざすと同時に、黒人の自立的コミュニティの建設を追求した。このことによって、フィラデルフィアNAACPは、黒人中流層のみならず、貧困層、労働者階級を含めた黒人コミュニティ全体の幅広い支持と参加を勝ち得た。黒人コミュニティを自覚的政治勢力に成長させたのである。そうして、フィラデルフィアにおける黒人の政治的エンパワメントを確立する土台を作った。彼ら自身は、「我々は、ブラック・パワー」であると叫んだが、現実には、この運動は分離主義ではなくアメリカニズムの実現、すなわちシヴィック・ナショナリズムと呼ばれる「自由・平等・民主主義といった普遍的理念を核とする共同体意識」の形成に吸収されたといえる。<sup>(10)</sup> AAは人種差別の解消を謳いながら、人種を特定し、差別（優遇）せざるを得ないという自己矛盾によって、いまや崩壊の危機に直面している。1960年代初頭のフィラデルフィアの闘いは、本来のAAのあるべき形を我々に想起させる。平等で民主的な社会の形成は、まさに「草の根」の住民運動と彼らの政治的自覚—社会の主人公としての—によるものであることを教えている。

なお、史料としては、1960年代初頭のフィラデルフィア市における地方新聞であった *The Philadelphia Bulletin* を事件の経過を追うために使用した。またNAACP委員長セシル・ムーアの言動および運動の流れについては、フィラデルフィアの黒人新聞 *The Philadelphia Tribune* に依った。フィラデルフィア市人権関係調整委員会 Commission on Human Relations (以下CHR) による1950年代から60年代の年次報告は事件の背景を考察する上で有効であった。また、レオン・サリヴァン牧師による著書、講演・報告の記録、当時を知る人びとのインタビューなども利用した。

(8) William J. Wilson, *The Truly Disadvantaged: The Inner City, the Underclass and Public Policy*, University of Chicago Press, 1987. を参照。

(9) Skrentny, *The Ironies*, pp. 76-110 を参照。また、Bayard Rustin, "The Blacks and the Unions," Originally printed in *Harper's Magazine*, 1971. ( <http://www.socialdemocrats.org/blktu.html> ) も参照。

(10) 貴堂嘉之・戸邊秀明「日米のナショナリズム・国民意識に関する研究史」樋口映美・中條献編『歴史のなかの「アメリカ」——国民化をめぐる語りと創造』、彩流社、2006年、373頁。

## 1 背景

この章では1960年代初頭のフィラデルフィアにおける人種をめぐる社会経済状況を概観し、1963年の闘争の背景を示したい。第一に特筆すべきは自立的黒人コミュニティの存在である。<sup>(11)</sup> フィラデルフィアの黒人コミュニティについては、アンテ・ベラム期まで遡る伝統がある。第二次大戦後には、北部市域から白人が流出し、その空き家に南部から移動してきた黒人が居住した。北部市域の人口は膨れ上がり、ここに大きな黒人コミュニティが誕生した。移住してきた黒人の中には、技能労働者が少なからず存在し、賃金労働や小規模自営業で収入を得た。1959年には非白人の43%が貧困状況にあったが、同時に、2万人以上(10%)の比較的富裕な層も誕生している。(1949年では66%が貧困であり、比較的富裕な層は0.6%であった。)非白人の多くは製造業、小売業、家事従業労働などに就いたが、注目すべきは、公務員が白人と同率であり、専門職に就いている非白人は、白人の専門職の割合より多かった。私企業の差別的雇用を避けて、高等教育を受けた黒人は、市の公務員となる率が高かった。貧困層が圧倒的多数を占めていたとはいえ、黒人コミュニティは「ゲットー」地域ではなかったといえる。<sup>(12)</sup>

第二の特徴は、1950年代初頭から民主党市政が存在したことである。民主党リベラル派の市長の下、市は人種差別の解消について努力をしてきた。1948年に市議会は、全米で最初の「公正雇用平等実施条例」を採択し、1952年には「人種関係調整委員会 Commission on Human Relations」が設置された。この委員会の歴代委員長には黒人が任命された。CHRの年次報告書によれば、1953年から1962年までの10年間でCHRが受理した雇用差別の訴えは1161件にのぼり、うち人種差別の訴えが992件であった。<sup>(13)</sup> NAACPとCHRは協力関係にあり、CHRはNAACPの裁判闘争を支援した。

第三の特徴は、白人エスニック集団のまとまりも強かつたことである。ドイツ系、アイルランド系のみならず、19世紀末以来、南・東欧系移民が、独自のコミュニティや職業別集団を形成していた。黒人への反感は19世紀には白人の暴動となって表れた。<sup>(14)</sup> 階級的自覚を白人性の認識の上に形成した白人エスニックの労働者階級にとって、急速に膨らんだ黒人人口は脅威であった。<sup>(15)</sup>

とりわけ建設業における有色人種の排除は歴史的・文化的な側面が顕著であった。また、人種、性差、エスニシティ、出自による職業分布が支配的であり、排他的雇用形態はエスニック集団

(11) Julie Winch (ed.), *The Elite of Our People: Joseph Wilson's Sketches of Black Upper-Class Life in Antebellum Philadelphia*, The Pennsylvania State University Press, 2000; W. E. B. Dubois, *The Philadelphia Negro: A Social Study*, University of Pennsylvania Press, 1996 (Originally published in 1899), pp. 168-178. デュボイスは、セヴァンス・ワード 2276 家族中、富裕層を 96 家族 4.2% と記録している。

(12) 148. 2. Commission on Human Relations, *Philadelphia's Non-White Population 1960, Report No.3, Socioeconomic Data*, City of Philadelphia. Location: City Archives of Philadelphia.

(13) 148. 1. Annual Reports, 1948-1951, 1953-1969, Commission on Human Relations, Archival Record Series. Location: City Archives of Philadelphia.

(14) 鶴月裕則「アンテベラム期フィラデルフィアにおける反黒人暴動と黒人コミュニティ」『史苑 48-2』、1988年。

(15) S. A. Paolantonio, *Frank Rizzo: The Last Big Man in Big City America*, Camino Books, Inc., 2003, p. 109.

の絆を深めていたともいえる。<sup>(16)</sup> 市は CHR を通じて、建設業者や組合に対して市条例を守るよう要請・説得してきたが、それ以上の措置はとらず、業者や組合側もこれらの要請を無視してきたのである。1950 年代から、連邦、州、市によるフィラデルフィア市の大規模再開発が相次ぎ、空前の建設ブームが起こっていた。建設業は極めて大きな労働市場であったが、これら建設現場で働く技術職の黒人の姿は皆無に等しかった。1963 年 2 月、『フィラデルフィア・トリビューン』紙は「ジム・クロウとの相思相愛の契約」と題する 5 回連続の特集記事で、建設労働者の技能訓練教育から、その技能テスト、資格取得の合否、また技能労働者の雇用斡旋・採用までコントロールする職業別労働組合の「事実上の」人種差別を厳しく糾弾し、これらの業者と契約を結んでいる市の姿勢を批判している。<sup>(17)</sup>

## 2 1960 年代初頭、フィラデルフィア黒人の闘いとその成果

1950 年代末から 1960 年代初頭にかけて、北フィラデルフィア、ジョン・バプティスト教会の牧師、リオン・サリヴァンが展開した「セレクティヴ・パトロネージ」の運動を皮切りに、雇用における人種差別を廃し、社会的平等を求める大衆運動が発展する。本節では、この一連の闘いを概観する。この闘いが勝ち取った市の AA 政策は、1960 年代の後半には、連邦のマイノリティ政策の基本となった。しかし反面で、連邦政府の AA をめぐっての立場の違い・利害の対立は、公民権支持勢力の中に分断・亀裂を生み出すことにもなった。このような、彼我の微妙な力関係を左右する難しい問題を、フィラデルフィアの運動がどのように位置づけ、どのような形で乗り越えたのかを検討することは、今日の AA 政策をめぐる議論にも新しい視点を提供すると思われる。そのキーワードは、<sup>(18)</sup> コミュニティのエンパワメントであった。

1950 年代、黒人運動の最大組織であった NAACP の活動は低迷していた。この原因は、「冷戦と公民権」の文脈の中で説明されうる。1950 年代の NAACP は政府の主導する冷戦政策の一環としての、反共を誓った公民権運動勢力であった。<sup>(19)</sup> フィラデルフィア NAACP もその渦中にあった。1946 年トルーマン大統領の公民権委員会のメンバーにフィラデルフィア NAACP から弁護士のサディ・アレグサンダーが召集された。1948 年、NAACP の委員長選挙においてアレグサンダー派が勝利し、NAACP 内の左翼的勢力は一掃された。以後 1950 年代は冷戦コンフォー

(16) Sugrue, op. cit., pp. 156-157. また当時の建設業の雇用形態について、「アファーマティブ・アクションは白人のものだった」と論じる、Ira Katznelson, *When Affirmative Action Was White*, W. W. Norton & Company, 2005, pp. 1-24 がある。

(17) "Jim Crow's Sweetheart Contract," *Philadelphia Tribune*, February 12, 16, 19, 23 and 26, 1963.

(18) 「エンパワメント」については、ジェイムズ・ジェニングズ（河田潤一訳）『ブラック・エンパワメントの政治——アメリカ都市部における黒人行動主義の変容』、ミネルヴァ書房、1998 年を参照。

(19) Mary L. Dudziak, *Cold War Civil Rights; Race and the Image of American Democracy*, Princeton University Press, 2000. 中野耕太郎「市民権改革の始動——冷戦と人種問題」紀平英作編『帝国と市民——苦悩するアメリカ民主政』、山川出版社、2003 年、166-212 頁。中野はこのような公民権派の主張を「冷戦リベラリズム」としている。

ミティに基づいた稳健・漸進主義がその指導部の主流となった。<sup>(20)</sup> 1963年、新委員長セシル・B・ムーアが「NAACP 内部の、腐敗した、紳士の衣装をまとった連中」と激しく攻撃したのはこのアレグサンダー派である。<sup>(21)</sup>

1952年、北フィラデルフィアに赴任してきたリオン・サリヴァン牧師は、前任地ニューヨークで社会活動を経験してきており、NAACP の会員でもあった。サリヴァンは、すぐさま「教会の壁を越えて」コミュニティ改善の活動を展開し始めた。1953年には「青少年問題対策会議」を立ち上げ、教会の地下室に「青年雇用センター」を開設した。これは人種を問わず青年たちに仕事の斡旋をする施設であったが、黒人に対する雇用差別はあからさまであった。黒人青年の職なし状況が彼らの貧困、生活荒廃の最大の原因であると認識したサリヴァンは、フィラデルフィア黒人の取り組むべき課題は、南部公民権運動の応援ではなく、雇用における人種差別を解消することであるとして、ユニークな運動を開始する。<sup>(22)</sup>

1958年、サリヴァンは「セレクティブ・パトロナージ・プログラム Selective Patronage Program」を展開する。これは、「働くことができないところでは買わない」ことを教会員で実行した不買運動である。サリヴァンを中心に組織された牧師集団（「400人委員会」と呼ばれた）が、人種差別で訴えられた企業や商店に対する不買運動を、教会の祭壇から呼びかけた。黒人コミュニティにおける教会の組織力は絶大であり、サリヴァンによれば、最大の成功の要因は、プログラムの「開始」と「終了」を、祭壇からの指令だけで、「最小限の」時間で達成できたことであった。「ボイコット」や「優先枠」という微妙な表現は使わずに、「最小限の」黒人の雇用を要求するというこのプログラムは、1963年まで29回展開され、その間、2,000人以上の黒人が技術職を得ることを可能にした。また、このプログラムのターゲットになることを恐れて、自主的に人種差別は行わないと宣言した企業や商店の数は300社に達するという「連鎖効果」<sup>(23)</sup> があった。

この運動がフィラデルフィア黒人に自らの力を自覚させた点で画期的であったことは勿論ではあるが、さらに重要なことは、この運動には CORE の若者たちが積極的に参加したことである。フィラデルフィアの CORE には、少なからぬ（白人を含めた）左翼的潮流が含まれていたが、サリヴァンはこれらの若者とも協力した。セレクティブ・パトロナージ・プログラムは一気に運動参加者の幅を広げたのである。このことは NAACP の指導部とその方針にも影響を与えた。フィラデルフィア支部は、裁判闘争の枠組みの中でのみ問題解決を図るという従来の方針を大きく転換することになる。

1963年4月、CORE の若者たち十数人が、市長室を占拠し、座り込みを行い、「市の建設ブ

(20) Mathew J. Countryman, *Up South; Civil Rights and Black Power in Philadelphia*, University of Pennsylvania Press, 2006, pp. 33-47.

(21) Arthur C. Willis, *Cecil's City: a history of blacks in Philadelphia, 1638-1979*, Carlton Press, 1990, pp. 92-94.

(22) Leon H. Sullivan, *Build Brother Build*, Macrae Smith Company, 1969, p. 57.

(23) *Ibid.*, pp. 70-84.

(24) Countryman, *op. cit.*, p. 134; Paul Lyons, *The People of This Generation: The Rise and Fall of the New Left in Philadelphia*, University of Pennsylvania Press, 2003, pp. 20, 170.

プロジェクトの契約におけるジム・クロウを終わらせよ」と要求した。COREの直接行動に対して市長はほとんど対応しなかった。5月には、NAACP フィラデルフィア支部の新委員長セシル・B・ムーアが、バーミングハムでの黒人に対する警察による暴力的弾圧に抗議して集会と行進を組織した。2,000人以上が集まったこの集会の中で、ムーアは、「我々は、いかなる形の暴力にも反対する。バーミングハムとフィラデルフィアの違いは、地理的なものだけである。アラバマと同じことが当地でも起こっていることに盲目であってはならない。」と演説した。さらに、フィラデルフィアの建設現場における雇用差別に言及して、激しい口調で市を非難し、「我々は、正義のためなら進んで牢にでも入る」と声を張り上げた。ムーアが NAACP の動員力を誇示して、闘争の主導権を握ったことは明らかだった。<sup>(25)</sup>

NAACP が組織したデモやピickett で、建設現場での作業の停止や混乱が続いた。<sup>(26)</sup> 5月20日、CHR は市長に対して『市事業との契約業者と建設業について』と題する報告書を送り、非白人の建設業における雇用はほとんど皆無であると報告し、(1)これまで排除されてきた資格のある黒人を適切な人数、雇用することが求められること、(2)市は資格のある黒人を市との契約業者に紹介すること、(3)業者と組合の雇用斡旋所 union hiring hall は CHR の監視を受けることを提案した。<sup>(27)</sup>

5月末、CORE はこの報告書に対し、「技能職から長年、黒人を排除してきたことを償うために」、市の契約と技能訓練プログラムに、15%の黒人「割り当て」を盛り込むよう要求した。<sup>(28)</sup>

この要求は運動内に波紋を起こした。まず、これまで運動を支持してきた AFL-CIO の委員長であったミニーが反論した。6月、彼は連邦上院での演説の中で AFL-CIO は南部でも北部でも人種差別に反対の立場を貫いてきた、一部地方支部が長年の偏見や慣行に固執していることは遺憾なことであり是正を求めるにしながらも、他方で、「人種的優遇を行うことと、レイオフにおいてシニオリティ条項を覆すことは2つの『落とし穴』である、単に別の差別に置き換えるだけであり」、誤りであると指摘している。NAACP ムーアもこの時点では CORE と同歩調をとらなかった。6月20日になって、「我々の最終的な目標は、能力による雇用である。黒人に対する長年にわたる建設業界からのほとんど完全な排除による結果は今すぐに除去されなければならない。現在のところ、目標は30%程度と考えている」として、「割当て」の要求を、黒人側が一致して提出するに至った。しかし、その文言からは、黒人側の指導者集団で方針の

(25) “CORE Says It'll Prod Tate Until City Job Bias Ends,” *Philadelphia Bulletin*, April 17, 1963. 以下の日付の記事も参照。  
*Ibid.*, April 19, 1963; April 23, 1963; May 12, 1963.

(26) “Sit-ins Win, Tate Orders Rayburn Plaza Job Halted. He Tells CORE Unions Must Admit Negroes,” *ibid.*, May 14, 1963. 以下の日付の記事も参照。  
*Ibid.*, May 16, 1963; May 19, 1963; May 20, 1963; May 21, 1963.

(27) 148. 15. “Subject: Conclusions and Recommendations Pertaining to Employment Discrimination on Certain City Work Contracts and in the Construction Trade,” *Memorandum*, May 20, 1963. Location: City Archives of Philadelphia. Location: City Archives of Philadelphia.

(28) “Negro Labor Quota on Jobs Set by CORE,” *Philadelphia Bulletin*, May 22, 1963.

(29) “Bar Job Bias Now, Meany Asks Senate,” *AFL-CIO NEWS*, June 27, 1963.

検討が行われた結果、クオータの要求はあいまいになっていることが窺われる。<sup>(30)</sup> 6月末には建設業組合と NAACP が徹夜で直接交渉し、合意に達した。6建設業組合の中で蒸気管工組合のみが脱落、「彼らは平等でなく優遇を要求している。」<sup>(31)</sup> と言った席を蹴った。ムーアは学校建設現場に徹夜で待っていた人々の前で勝利の報告をした。

市長は「公正雇用実施法 Fair Practice Code」に署名した。この法律は、CHR に市との契約業者を調査、査察し、是正勧告および悪質な場合、提訴の権限を与えるもので、同時に CHR に 159,000 ドルの追加予算が組まれた。また罰則規定が設けられ、最高 300 ドルの罰金または 90 日以内の懲役が課せられることになった。8月の末には建設業組合と CHR が合意書に調印し、「技術のある黒人を受け入れるとともに、技術者養成プログラムの差別をなくす」ことが決まった。黒人新聞『フィラデルフィア・ブルティン』紙は「ついにドアが開かれた」と書いている。<sup>(32)</sup>

1963 年の合意では、企業や組合側の「任意の是正 voluntary affirmative action」を前提にしていたが、あからさまな差別をすることはできなくなった。悪質な差別は犯罪とみなされた。CHR の調査・調停活動も厳格化し、CHR は、市の契約業者に対して、その指導に従うという「同意書 Compliance Form」、企業への「応募用紙 application form」、および従業員の人種構成調査結果を提出させ、差別の有無をチェックした。<sup>(33)</sup>

フィラデルフィアの闘いは、他の北部大都市の黒人労働者の目標となり、1965 年以後いくつかの都市で同様の条例、プランが生み出される。1964 年、公民権法の成立後、雇用や住宅などの経済的・社会的差別の解消が全国的課題となる中で、連邦政府は AA 政策を人種問題の切り札として考慮に入れるようになっていく。しかし、AA をマイノリティ優遇策と見なした労働組合側はこれに異議を唱えた。AA は公民権勢力と労働側に必ずしも一致して取り組めない課題となる。ジョンソン政権はこの不一致に悩まされ、ニクソン政権はこれを利用した。<sup>(34)</sup>

フィラデルフィアの 1963 年の闘いの成果は、「市条例」にとどまらない。ムーアに指導された NAACP と黒人コミュニティは、グレイハウンド・バス会社などの大企業に対しても専門職への黒人の雇用を要求し、勝利している。これらの闘いの中で NAACP は、社会的な影響力を拡大した。

1964 年 7 月には公民権法が制定されたにもかかわらず、北部大都市では相次いで大規模な

(30) "Put Negroes In 15% of Jobs, Bias Panel Told- Ministers, CORE Make Demands for Union Membership," *Philadelphia Bulletin*, June 20, 1963.

(31) *Ibid.*, June 27, 1963.

(32) "Mayor Signs City's Fair Practice Law," *ibid.*, June 10, 1963; *Ibid.*, June 13, 1963. "6 Craft Unions Here Agree To Accept Non-Whites-OK Accord With City, Deny Bias," *ibid.*, August 20, 1963.

(33) 148. II. Affirmative Programs. Employment Practices Files, 1964-1966, Archival Record Series, Commission on Human Relations. Location: City Archives of Philadelphia.

(34) "Unions Vow to End Race Bias on Jobs: 300 Labor Leaders Hear Kennedy Plea At White House," *Philadelphia Bulletin*, June 14, 1963; Graham, *op. cit.*, pp287-297.

(35) Skrentny, *op. cit.*, pp. 208-209. は、アファーマティブ・アクションによる危機管理 (crisis management) と捉えている。1960 年代後半の都市暴動の頻発は南北戦争以来の「アメリカの危機」と見なされた。

暴動が発生した。1964年8月末にはフィラデルフィアでも大暴動が起きた。<sup>(36)</sup> 暴動は警察と市民の些細な小競り合いから始まったが、瞬く間に北フィラデルフィア一帯に広まり、白人経営の商店が略奪、投石、放火のターゲットとなった。判明した暴動の原因是「流言飛語」であり、意図的にこれを流し、人々を扇動したムスリムの活動家が後に逮捕されている。ムーアやサリヴァンたち黒人指導者は市や警察の依頼を受け、「警察によって殺された」とされる婦人を横に乗せて暴動地域をパトロールし、ハンドマイクで家に帰るように呼びかけて回った。しかし、この車にも暴徒は石を投げ、ムーア自身も負傷した。この暴動の渦中で、彼らが痛感したのは自律的コミュニティの必要性であった。<sup>(37)</sup>

サリヴァンは1964年1月からオポチュニティ・インダストリアライズド・センター（OIC）という黒人の自立を促す職業訓練施設の設立に没頭していた。刑務所であった建物を市から借り受け、企業、商工会議所、個人からの寄付などの資金を集め、この施設を改造し、住民の必要に沿った教育を提供した。1965年にはジョンソン政権による「貧困との戦い」関連予算からの援助も得た。さらに彼は、コミュニティの活性化のため、黒人住民の出資と運営によるショッピングセンター（プログレス・プラザ）の設立なども行った。1960年代後半になるが、1967年大統領選挙戦の最中、「ブラック・キャピタリズム」の優等生としてニクソンの賞賛を受け、北部フィラデルフィアは彼が選挙中訪問した唯一の黒人地区となった。プログレス・プラザ、OICの運転資金についても、連邦AA関連予算から援助を獲得した。<sup>(38)</sup>

一方、ムーアは自己の立場をより鮮明にし、大衆とともにあることを宣言し、ますます旧指導部と対立した。1965年初頭、支部委員長選挙で圧勝するとすぐに、黒人地域の中心にありながら黒人への門戸を閉ざしていた、名門ジラード・カレッジの人種統合を求める闘争に着手した。大学をデモンストレイションで取り囲み、裁判闘争と結びつけて、大学の人種統合化に取り組んだ。ジラード・カレッジの人種統合は、NAACPの旧指導部が裁判に訴えて敗訴していた、いわく因縁のある問題だった。3年後の1968年、連邦最高裁判所は「白人の孤児のみを受け入れる」というジラード・カレッジの入学規定は違憲であると裁定した。ムーアと北フィラデルフィアの黒人コミュニティの勝利であった。<sup>(39)</sup>

(36) “Race Riot! The Time Bomb Haunting All Large U. S. Cities; Judge Alexander Denies Phila. ‘A Racial Tinderbox’, Refutes Claim by Urban League Head That City Is Headed for ‘Explosion’,” *Philadelphia Tribune*, Saturday, August 8, 1964.

(37) *Ibid.*, Tuesday, September 1, 1964. このデモを暴力的に弾圧した当時の警察署長フランク・リッゾは、1960年代末から、ムーアと政治的に対立する保守派の市長となる。S. A. Paolantonio, *Frank Rizzo: The Last Big Man in Big City America*, Camino Books, Inc., 2003. 参照。

(38) Arlin M. Adams (第13区連邦巡回控訴裁判所判事)からニクソン大統領への手紙。この手紙には *U.S. News & World Report*, February 17, 1969 が添付されている。出典: Graham, Hugh Davis (ed.), *Civil Rights During The Nixon Administration, 1969-1974 Part 1: The White House Central Files*, A microfilm project of University Publications of America, 1989, Reel No. 5.

(39) Willis, *op. cit.*, pp. 146-160.

### 3 運動におけるリーダーシップ

フィラデルフィアを舞台とした 1960 年代の黒人運動は、南部の公民権運動に匹敵する意味がある。「法的平等」の上に「実質的平等」を確立するために、どのような道筋があるのかについては、公民権推進派の中で意見の一致は得られておらず、運動のリーダーシップをめぐって対立や勢力争いが始まっていた。このような全国的状況もある中で、フィラデルフィアでは黒人労働者や貧困階級の要求を前面に出し、彼らの行動力に依拠した、内容のある闘いが展開され、AA という政策を引き出した。同時に、黒人コミュニティを団結させ、自らが無視できない政治勢力であることを内外に知らしめた。これらの運動の中でリーダーの果たした役割は決定的に重要であった。本章では、そのリーダーシップについて検討する。

1962 年末、フィラデルフィア NAACP 支部委員長の選挙があった。この選挙で勝利したのが弁護士のセシル・B・ムーアだった。ムーアは太平洋戦争を戦った海軍将校であったが、1950 年代初頭にテンプル大学を卒業後、弁護士の資格を取り、フィラデルフィア黒人コミュニティの中で有能な弁護士として名を高めていた。<sup>(40)</sup> 同時にサリヴァンらとともに NAACP の活動や青少年育成にも携わっていた。彼は演説がうまく、無礼で過激な言葉を弄することもあったが、旧指導部を痛烈に批判し、黒人大衆を惹きつけた。彼は黒人の「分離」を主張し、白人と協調して政治的に同一歩調をとることは本来的に間違っており、そのような行動をとる「いわゆる黒人 Negroes」は「白人権力機構の道具」に過ぎないという汚名を着せられても致し方ないと演説した。1963 年 1 月の委員長就任演説で「我々は闘って、闘いぬく。私と一緒に牢に入る覚悟でいてほしい。フィラデルフィア黒人の苦悩は自分が一番よく承知している」と大きな声で訴えた。<sup>(41)</sup>

彼がまず取り組んだのは、フォード財団による「北フィラデルフィア社会問題調査研究事業」の問題であった。財団はこのプロジェクトに 1,700 万ドルを提供していた。ムーアは、この調査活動のメンバーに黒人が含まれていないこと、とりわけ NAACP に何の相談もなくことが運ばれたことに対して抗議の声をあげた。ムーアは黒人の参加を要求して、フォード製品のボイコットを呼びかけた。即座に反応したのは、フォード財団よりも NAACP 旧指導部であった。元委員長のアレクサンダーを中心に 16 人が連名でムーアに書簡を送りつけ、「大言壯語、ばかげた脅し、効果のない悪乗りなどは、ブラック・ムスリムのやることで NAACP のものではない」と非難したのである。ムーアはすぐさま反論した。彼は 2 月に 3,000 人規模の反対集会を開く計画があることを示して、16 人を「進歩と抗議に不満を持つ人々」であると評した。<sup>(42)</sup>

ムーアはニューヨークの NAACP 本部に対してフォード財団闘争への支持を要請したが、本部は静観の立場をとった。支部役員人事でも混乱し、この間 4 人の役員が辞任したが、2 月 24

(40) James Spady, "Cecil B. Moore 'A Soldier for Justice' From Dry Fork Hollow to Girard College, Dedicated to Adam Clayton Powell, Jr. and Nathan F. Mosses," *Philadelphia News Observer*, 1985.

(41) Sugrue, *op. cit.*, pp. 153-155.

(42) *Philadelphia Tribune*, Saturday, January 12, 1963; *ibid.*, Tuesday, January 22, 1963.

日には3,000人近い黒人大衆が集会を持ち、ムーアを熱狂的に支持した。またこの集会では南部公民権運動家メレディスへの支援金が1,600ドル寄せられた。ここでもムーアは自分こそが80万人の黒人を代表しているとして、アレクサンダーたち旧指導部のような「上品な」方法に捉われていたのでは、多くの黒人の置かれている状況を改善することはできない、「大衆の行動」によってのみ勝ち取られると主張した。「フィラデルフィア・トリビューン」紙はムーアを「新しい救世主」<sup>(43)</sup>呼んでいる。ムーアは委員長としての在任期間を通じて、NAACP旧指導部、およびNAACP本部とことごとく対立した。

一方、サリヴァンは1950年代末からセレクティヴ・パトロネージで雇用差別の問題に取り組み、一定の成果を得る中で、「準備ができていない統合は挫折である」と認識した。サリヴァンは「自由競争制度」を支持し、これは「世界でもっとも偉大な制度」であると認め、黒人をこの競争に参入させること、「パンくず」でなく「パン」を獲得できるようにすることをOICの目的とした。すなわち、企業の要請する技術・技能を黒人青年に修得させて産業界に送り込むことである。しかしながら、それは政府主導の「上からの」プログラムではなく、黒人民衆自身の下からの運動でなければならず、それゆえ黒人「ゲットー」の中心に位置しなければならないとサリヴァン自身が語っている。フィラデルフィアの「戦闘的」運動のリーダーと彼らの情熱を、「生産的」な「教育」と「職業訓練」の分野で生かすこと、自立した「納税者」を育てること、そのことによってアメリカ社会に貢献すること、また貢献しているという自覚を黒人が持てるようになることを目指したのである。<sup>(44)</sup>

この点に関して川島正樹は、「黒人自立化」の地域運動を、「伝統的に『アメリカニズム』が称揚してきた『自助努力』の要素を取り入れて広範な国民的支持の確保に努めつつ、税制優遇措置や純粋競争方式の補助金支給など、政権交代に左右され難い、政府の間接的・直接的支援制度を巧みに利用し、志を共有する個々人と社会的支援のネットワークを組み合わせている。生まれながら不利な条件を背負わされた人々の自立を社会的に保証する仕組みの構築を目指す」、人種の脱構築の試みと見ることができると評価している。<sup>(45)</sup>

サリヴァンが「人種の脱構築」を明確に目指したことは確認できないが、現OIC委員長トマジニア氏の言によれば、OICはその設立のはじめから、黒人のみならず白人、ネイティブ・アメリカンも受け入れていた。サリヴァンは、政府からの援助は民主党、共和党的政権交代の中で揺れ、後退の時期もあったが、現在の成功の原因は、第一に経済界と政府の両方のコネクションを保ち続けたこと、第二に拡散するOIC支部が、それぞれ自立的に、その地域コミュニ

(43) *Ibid.*, Tuesday, January 29, 1963. “3000 Cheer ‘New Messiah’ Moore at NAACP Rally,” *ibid.*, Tuesday, February 26, 1963. Willis, *op. cit.*, pp. 92-99 も参照。

(44) “Statement of Rev. Leon H. Sullivan, chairman of the board of the Opportunities Industrialization Center,” *Civil Rights during the Johnson Administration, 1963-1969, Part V: Report of the National Advisory Commission on Civil Disorders (Kerner Commission)*, Reel 3, Box 3, 0103-0136, edited by Steven F. Lawson, A microfilm project of University Publications of America, Inc.

(45) 川島正樹「公民権運動から黒人自立化運動へ——南部を中心に」川島正樹編『アメリカニズムと人種』、名古屋大学出版会、2005年。

ニティのマイノリティや不利な立場にある人々の育成を中心課題としたことであると述べている。「人種を問わず、不利な立場にある人々を最優先と考えている」という基本方針は、現代アメリカの人種問題を捉える上でも、重要なテーマであり、「コミュニティ（ゲットーではなく）の現実から出発したサリヴァンの運動を支える理念である。」「貧困はカラー・ブラインド」であるとして、黒人のみならず全ての「緊急を要するほど不利な立場にある人々 disadvantaged at risk」<sup>(46)</sup> に OIC は門戸を開いた。この理念を掲げて、サリヴァンは、白人企業経営者や指導層との「交渉」を積極的に行つた。

いうなれば、ムーアとサリヴァンはあい補って、セシリー・バンクス氏の言を借りるなら、「W·E·B·デュボイスとブッカー·T·ワシントンが協力したかのように」当時のフィラデルフィアの黒人を導いた。<sup>(47)</sup> 実際、1964 年の暴動以来、フィラデルフィアでは暴動が起こっていない。暴動に関った多くの青年を OIC は再教育し、技術を身につけさせ、仕事を斡旋した。また、ムーアによる「ジラード・カレッジ闘争」が多くの若者をひきつけた。1960 年代の後半、「長く暑い夏」に悩まされ、荒廃した多くの北部大都市の状況と異なる様相をフィラデルフィアは呈していたことになる。

ここで、「平等と優先」という微妙な問題に、2人がどう対処したのかについて触れておく。6月末の NAACP と組合の合意書の内容は、5人の黒人技術者を市の建設現場に採用するというものであり、レイオフの必要が生じた場合には、先任者優先条項に従うことになっていた。その上で、雇用と解雇は皮膚の色、信条、国籍を考慮に入れることなく決定されるというものであった。すなわち、マイノリティ優先の文言は含まれていない。組合側もこの内容で合意するに当たって大会を開き、組合員に説明している。その中で、合意は、フィラデルフィア市民と組合の利益に沿うものであり、市の 30%を占める黒人市民も納税者であり、その税金によって生み出される「仕事」に就く権利を有すること、また合意が実現されない場合の「混乱」による市民の不利益は計り知れないなどと説明された。組合員は拍手で承認した。組合側も合意を「敗北」とは理解していなかったのである。NAACP 側にとっても、この合意は大きな勝利だった。ムーアは、この合意事項は今後の経済的社会的平等を求める闘いへのステップになると確信していた。何よりも、NAACP のピケットラインに集結したのは、牧師・専門職についているコミュニティ・リーダーから、学生、ストリート・ギヤング、ブラック・ムスリムに至るまで、ほとんど全ての階層が含まれていた。また、合意はムーアの当初の要求と合致していた。差別的雇用は行わないという基本線が築かれたからである。優先枠の問題はあいまいにされた。ムーアはこれに固執せず、少数の（token）黒人の雇用で妥協した。アーサー・ウィリスによれば、彼は、技能労働者の数を揃えられないという現実の中、ここで妥協し、次の闘いに備えることを選択した、ムーアは適切な「撤退」と次の攻勢に備えての「隊列の建て直し」の時期の図り

(46) Reverend Leon H. Sullivan, "From Protest to Progress: The Lesson of the Opportunities Industrialization Centers," *Yale Law & Policy Review* Volume IV, Number 2, Spring/Summer 1986; 筆者によるトマジニア氏 インタビュー (2004 年 9 月)。

(47) セシリー・バンクス氏 インタビュー (2006 年 2 月)。

方を知っていたとある。<sup>(48)</sup>

## おわりに

1967年、NAACP フィラデルフィア支部は本部の方針により、5つの支部に分割された。ムーアの影響力は北フィラデルフィアのみに縮小されることになった。この分割には、フィラデルフィア支部内の反ムーア勢力の策動があったとされている。ムーアの手法は NAACP の基本路線とは異なるものであった。彼はこれを機に NAACP を去り、新しい運動組織を発足させた。新しい組織は「黒人独立連合 Black Independent Alliance」と名付けられ、主に青年、特にストリート・ギャング達を結集した。1968年まで続いたジラード・カレッジ闘争の勝利は、ムーアが動員したこれらの若者に負うところが大である。ムーア自身、NAACP を去ってからは、弁護士活動の傍ら、これら青年たちの教育や社会復帰への支援、相談などに奔走した。1975年には市会議員に立候補し当選する。<sup>(49)</sup>

サリヴァンは、OIC の運営を成功させるとともに、教会員の寄付やフォード財団等の企業基金を得て、1968年にはショッピング・プラザを建設、さらに「ジオン投資協会 Zion Investment Association」を立ち上げ、教会員の出資による企業を次々に設立することになる。ニクソン政権によって「ブラック・キャピタリズム」の優等生と賞賛され、彼の人種政策に利用された面もあるが、サリヴァン自身は、彼の初心である「黒人の自立への援助」を一貫して追及したのである。1980年代には反アパルトヘイトの取り組みとして、南アフリカにも OIC を設立した。2007年の現在も、北フィラデルフィアの古い監獄に芽生えた彼の事業は、アメリカのみならずアフリカ、アジア、ヨーロッパでも花を咲かせている。<sup>(50)</sup>

1960年代初頭のフィラデルフィアの黒人の闘いをそのリーダーシップに焦点を当てて述べてきた。フィラデルフィア NAACP が 1950年代の自己抑制的運動から「戦闘的」「大衆的」組織に脱皮し、公民権以後の社会的・経済的平等の達成に成果を挙げたこと、またそれは、黒人コミュニティの再生とエンパワーメントを追求する中でこそ達成できたことを強調した。ムーアとサリヴァンは、北部大都市としての、フィラデルフィアの黒人の状況と課題を明確に捉え、それを黒人大衆にわかりやすく提示し、彼らの自覺的な行動を引き出した。この間、NAACP の会員数は 7,000人（1962年）から、50,000人（1965年）に増加した。増加した会員のほとんどは、北フィラデルフィア地域に住む貧困層であった。<sup>(51)</sup>

60年代の後半から、アメリカ全土を震撼させた都市暴動がフィラデルフィアでは起こっていない。ブラック・パワーを唱導したブラック・パンサー党や、ネイション・オブ・イスラム

(48) Willis, *op. cit.*, pp. 95-99.

(49) *Ibid.*, pp. 189-192.

(50) Leon H. Sullivan, *Moving Mountains; The Principles and Purposes of Leon Sullivan*, Judson Press, 1998. <http://www.oicofamerica.org/> も参照。

(51) Keiser, *op. cit.*, pp. 49-72.

の影響を受けた若者たち、そしてストリート・ギヤングの集団に至るまで、「蜂蜜が熊を引き寄せるように」 NAACP の運動に参加してきたのである。<sup>(52)</sup> 1968 年、ジラード・カレッジ闘争の勝利集会は、さながら彼らの「祭り」のようであったとウィリスは書いている。黒人コミュニティのエンパワメントを誇示するものであった。

AA 関連で起こった、北部大都市における白人住民と黒人住民の対立もフィラデルフィアでは回避されている。「コミュニティの絆は、どんな労働運動の成功にとっても決定的に重要」である。「組合闘争、ストライキ、ボイコット、企業責任追及キャンペーンに地域ぐるみの支援を巻き起こそうと思うなら、コミュニティを基盤とした組織化が鍵」であることを、フィラデルフィアの闘いは示したと言える。雇用差別などの人種問題を、「社会問題」ととらえ、人種的対立によってではなく、これを放置してきた政府や行政の責任を問うことで解決しようとしたフィラデルフィアの闘いは、公民権以後の AA 政策をめぐっての運動内のジレンマへのひとつつの解答ではないだろうか。

---

(52) Stephan Salisbury, "Moore's Activism Counteracted Stereotypes," *Philadelphia Inquirer*, July 7, 2004.

(53) Willis, *op. cit.*, pp. 156-158.

(54) Dennis A. Deslippe, "Do Whites Have Rights? White Detroit Policemen and 'Reverse Discrimination' Protests in the 1970s," *Journal of American History*, Vol. 91, No. 3, December 2004, pp. 932-960. この論文はデトロイトのアフアーマティブ・アクション政策に反対する白人市民の暴動を扱っている。

(55) Robin D. G. Kelley, *Yo Mama's Disfunctional!: Fighting Culture Wars in Urban America*, Beacon Press, 1997. 引用は村田勝幸・阿部小涼訳『ゲットーを捏造する——アメリカにおける都市危機の表象』、彩流社、2007 年、217-218 頁より。